●金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会・会報誌「やまざと」VOL. 20——山の子たちのうた号　2006年１月

やまざと

特 集　山の子たちの うた♪

「同じ時間」

ある朝、
会社に向かう電車の窓から ぼんやり外を眺めていると
はるか遠く 稜線付近を飛ぶ鳥の姿が目に映った。
ちょうどその時、倉谷の流れでは、
なんとなく楽しい気分の岩魚が水面から飛び跳ねた。
ブナオ山の斜面では、
年老いたカモシカが
鼻づらで落ち葉をかき分けながら瑞々しい草を探していた。
その瞬間、蛇谷ぞいの林の縁では、
周囲に気を配りながら草を食べていた幼い野ウサギが
拓けた草地にまで ついうっかり足を伸ばした。
枯れ木に止まっていたクマタカが
のこのこ出てきた野ウサギを
じっとうかがっていたことは、だれも知らない。

21期　竹中　敏（イラストと詩）

「やまざと」VOL. 20 CONTENTS　　山の子たちのうた号

表紙　「同じ時間」——21期・竹中　敏（クマタカのイラスト＆詩）
　　「やまざと」　題字——23期・中川　晃成（イラストに合わせて毎号執筆）

01p　特 集　山の子たちのうた
02p　ワンゲル歌集の思い出——14期・清家　雅幸
03p　「岳人のうた」に寄せて——15期・奥名　正啓
04p　歌は世に連れ——15期・舟田　節子
05p　子守唄「白山の尾根」——17期・川村　高弘
06～07p　ワンゲルＯＢ愛唱歌——18期・大西　正明
08p　ユーミンが好きだった——21期・大野　直子
09p　唄ったこと——22期・森　恵利子
10p　金沢大学ワンダーフォーゲル部の歌　募集！！

11p　やまざと写真館－1——11期・加藤　忠好

12p　メール宅急便「特別寄稿」
13～21p　カラコルム・トレッキング——15期・舟田　節子

22p　やまざと写真館－2——21期・大野　直子

23p　OB会支部だより
24～25p　KUWV首都圏支部設立奮戦記——９期・山中　重夫
26～28p　首都圏ＯＢ会 高尾山ＰＷ——18期・横井　恒雄
29～43p　近畿OB会 2004・12・12～活動大公開！！——8期・篠島　益夫

44～45p　秋の山小屋酒場——15期・舟田節子

46～48p　野沢温泉スキー合宿'05　報告記——19期・栂　典雅
49p　野沢温泉スキー合宿'06　予告記——11期・青柳　健二

50～51p　現役生2005年度活動報告——現役３回生・48期・伊藤　謙一

52p　やまざと写真館－3——20期・深田　進

53p　2005年 OB会会計報告——23期・鳥越　伸博

54～55p　OBひとこと通信

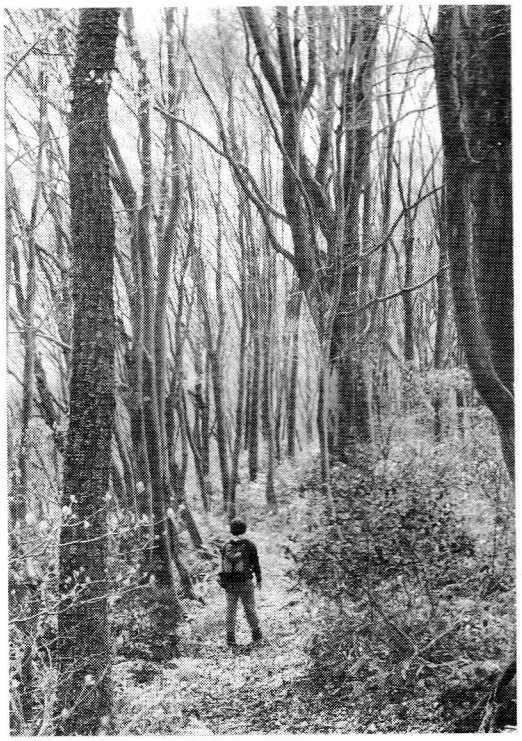
56～59p　住所録 '05変更分（2005年12月現在）——23期・名倉　均

特 集

山の子たちの うた

綾線でひとり　谷から吹き上げられる風にさらされていると
きまって口を突いて出るのが、「一人の山」だった。
♪山に憧れ　山に行ぃき～
言葉すくなぁぁぁ～に　ただあゆぅむ～♪

沈殿のテント。
雨で進めぬいらだちは、



福井県・越知山（おちさん）のブナ林を歩く
栂睦美（21 期）さん

♪雨が降り！　てるてる坊主が泣いても！
私たちは泣かないで！
山を見つめる～～～
ランララララン♪
山の子は　山の子は　みんな強いぞ　強いぞっ！♪

四高生みたいなバンカラ口調でがなる「山の子」で
ウサを晴らした。

そう。
ぼくらの唇には、いつも、山のうたがあったよね。
たのしい時も、さびしい時も…。

ワンゲル歌集の思い出

～黄ばみと滲みが、語りかけてくる～

14期　清家雅幸

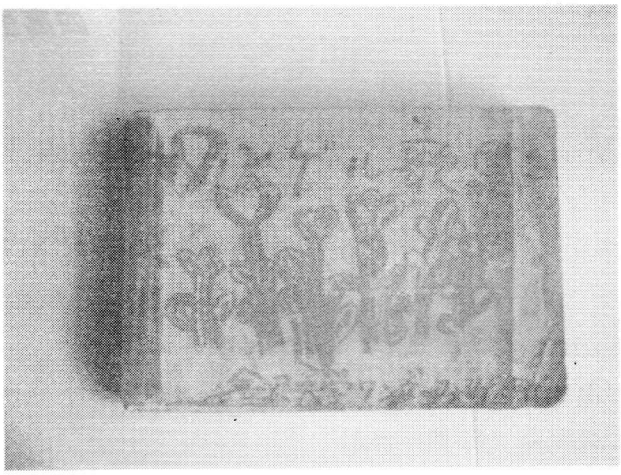
私が入学したのが昭和４４年、大学紛争の影響で国中が騒々しい時代であったからか、自然志向の強い同期が４０人位入部し、夏合宿は７パーティという盛況であった。

各パーティは５～６人の新人生を含む１２～３人で構成され、テントも２張りで夕食後のミーティング、沈殿の時の暇つぶしには食テン（メインテント）に集まり、ワンゲル歌集を取り出し歌ったものである。

また時代を反映してか、カレッジソングやフォークソングといったジャンルの歌が若者たちに支持されていて、それらのミニ歌集を手作り（青焼きコピーで）し、合宿などに持参した記憶もある。その歌集はなかったけれど、その当時の古いワンゲル歌集が私の手もとに残っていた。背表紙がとれているので何年発行のものなのか判らないが、黄ばんで滲みのついたページを見ると当時のことが懐かしく思い出される。

社会に出てからも知人と山に行くことが少なからずあったが、一緒に山の歌を歌ったことはほとんどない。やはり私にとってワンゲル仲間とともに歌う山の歌は特別なものである。

これからはＯＢ会の仲間と、それもできればテントの中でワンゲル歌集を開いて一緒に歌えたらいいな、と思っている。



「岳人のうた」に寄せて
～ふと気づくと口ずさんでいる～

15期　奥名正啓

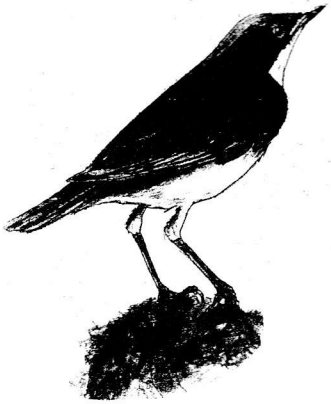
柄にもなく白山で自然解説もどきをしている。

どの山でもそうだが、山を訪れる人は大きくふたつのタイプに分かれる。ひとつは、上昇志向が強くとにかく上へ上へと頂上めざしていくタイプ。もうひとつは花の白山と言われるように高山植物を目当てにしているタイプであり、白山ではこのタイプのなかでも群を抜いて人気のあるものがクロユリである。今や白山とクロユリとは一体となって石川県のシンボルとなっている。そのクロユリは白山固有種でもなく、白山より東側あるいは北方の地域では広く分布しているというのに、わざわざ遠方からクロユリを目当てにやってくる。大きくもなく派手でもなく芳香を放つわけでもないが、中高年の登山者には却ってそこに大人の魅力を感じるのかもしれない。

そのクロユリを2番の歌詞に織り込んだ「岳人のうた」は新入部員なって真っ先に心に刻まれた山の歌である。その歌詞はまだ白山にも日本アルプスにも登ったことのない私にも、まだ見ぬ山々への憧れを感じさせるものだった。トレーニングを終えての帰り道、ふと気がつくとこの歌を口ずさんでいることがよくあった。そして今でも時に口を突いて出てくることがある。それは日常のせわしない生活から逃れたいとき、山でひとり静かに寝転んでいるとき、今では遠くなってしまった足元に広がるお花畑よりもはるかに仰ぎ見る山並みばかりを見ていたあの頃のことを思い浮かべるとき、そしてその頃の人たちに再会したときなど様々である。

山での暇つぶしは歌うことぐらいしかなかったように思うが、その場面はあまり記憶に残っていない。歌の中には、はっきりした歌の記憶としてではなく、色々なものがぼんやりしたものとして詰め込まれているようである。

歌から導かれてくるものもあれば、その時の気分から溢れて出てくる歌もある。「岳人のうた」は私にとってどちらにも欠かせない大切なものである。



歌は世に連れ

15期　舟田節子

「僕はね、吉永小百合と小・中同窓なんだよ。ピアノもね、彼女のお母さんに習ったんだよ。どうだっ！真似できねえだろ！」

それが、シングルの遠因になったものか…東京電機大ワンゲルＯＢというＴ氏は、年季の入った歌集をひろげながらそう言った。

ここはネパール、アマ・ダムラムの懐のようなパンボチェ村。７歳違いなら、同じ時代背景の側になってしまう彼と、懐かしいワンゲルソングを、キッチンからの煙にむせびながら歌った。節回しが微妙に違うことよりも、同じ部分が８割以上であったことの方に感じ入ってしまった。

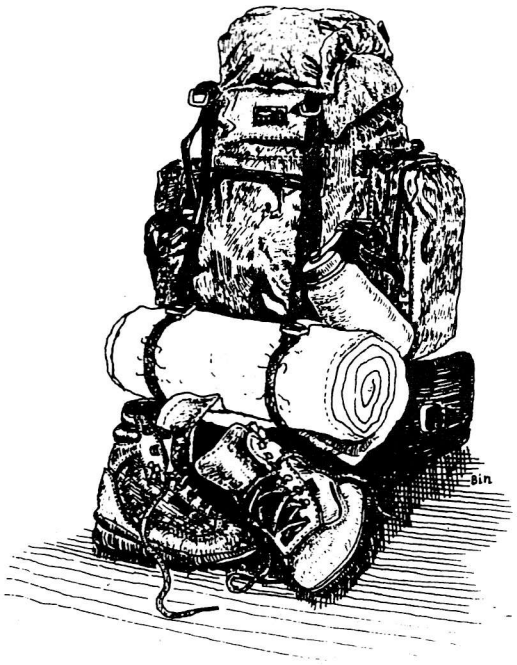
「そうですよね。あの頃、飽きもしないでこんな歌を毎晩歌っていられたんですよねえ」若者のバックパーカーが隆盛で、青春ソングを頬染めて謳い上げていた時代だ。それもまもなく、フォークソングや、独白めいた歌詞の歌の数々に席捲されていく…。やはり、「一つの時代だったのだ」というしかない。

現役当時、サボテンのような表紙絵の歌集の在庫が尽き、私は歌集編集委員長をやった。新しい歌をセレクトすると同時に、載っているけれど、誰も知らない歌の再発掘も試みた。

まずは編集委員をゾロゾロ連れて（覚えさせると称して）、美声の先輩辰野さん宅に押しかけた（当時は地元組の家族も、ワンゲルのとばっちりを受けて大変でした）。

カバーできなかった歌は、いくつかのワンゲル部にカセットを送り、「知っていたら、吹き込んで下さい」と、お願いした。そんな唐突な要請にも応えて、聞きづらい混成合唱がちゃんと返送されてきたことにも「そんな時代だった」の思いが強い。合ワンなど交流の度、新たに仕入れられてきた歌があった。

歌を共有でき、時代を共有できた、幸せな時代だったのだと、今にして思う。



子守唄
白山の尾根

17期　川村高弘

栂君からの　突然のメールで　一気に　30年前にタイムスリップしました。

我々17期は　こうした場にほとんど　登場しないのですが　同期の　さらっとした
それでいて会えばすぐ昔に戻られる付き合いが　気に入っています。

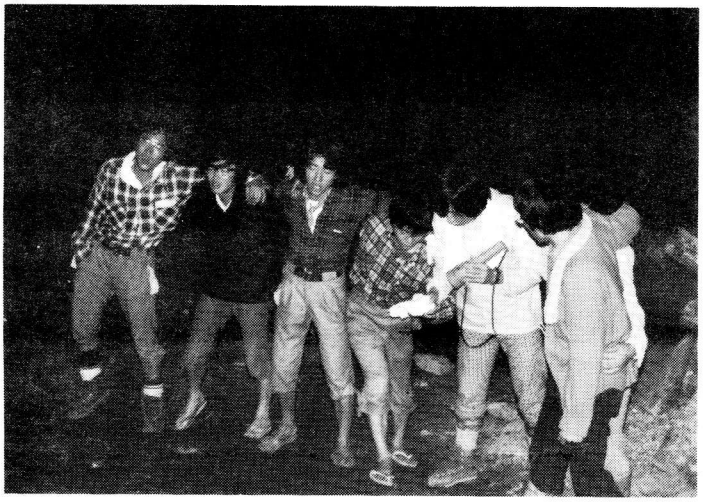
私は　イギリス3年半　アメリカ8年半と　計12年海外暮らしをしていて
現在は　アメリカ西海岸の　サンディエゴに住み
メキシコに　毎日　国境を越えて通勤する生活をしています。

さて　ワンゲル歌にまつわる　思い出ですが
それは　イギリスの　ウェールズで　長女が　生まれたときのことです。
泣き声やまぬ娘を　抱き上げて　あやすときに　何故か理由は　わからないけれど
思わず　白山の尾根　を　歌いながら歩き回りました。
“おっはいやー　おっはいやー　おっはいやー”
なんの事かわからない言葉を繰り返すので　うちの妻が　「何　その変な歌は？」
それ以来　私の子守唄は　いつも　白山の尾根
4年後に　長男が生まれた時も　やはり　白山の尾根
特別　好きなわけでもないのに　結局　我が家で知られた　唯一の　ワンゲル歌となりました。

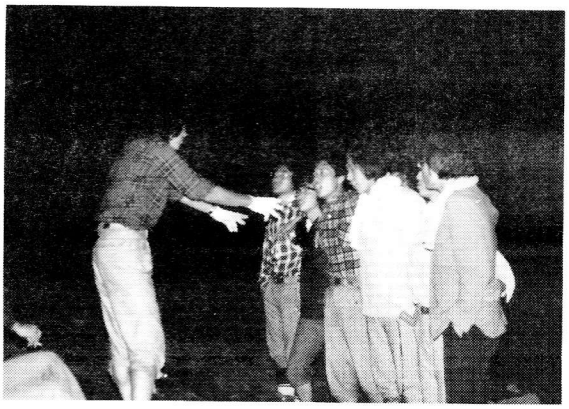
そのような娘も　今は
私がワンゲルにいた時と全く同じ年齢の　大学生
スキューバダイビングのサークルに入っています。
確か3年程前に　私がどこの　大学を卒業したのかと聞いてきました。
私が　金沢大学出身だと言う
それは　彼女の思いもよらなかった事らしく　びっくりしていました。
そのようなわけで　金沢の思い出も　伝統の子守唄も　継ぐ人間もなく　私一代限り。

おっはいやー　は　いいとしても
その後の　なるはー　らいらいよー　らいらいよー　って
いったい何の意味なのでしょう…？

ワンゲルＯＢ愛唱歌



18期　大西正明



話は３３年前に遡ります。入部したての私に１冊の小さな本（５cm×８cm×２cm程度）を先輩から渡されました。買わされました。確か２００円か３００円か。その表紙に、あまりうまくもない山と花の背景画と「ワンゲル歌集」と銘うった本でした。その中には、山に関する歌の他に四高寮歌・応援歌、当時の流行歌数点が手書きで書かれておりました。もちろん、山へ登ったことのなかった私には、この本が山登りと何の関係があるかは知る由もなく、奇異に感じた次第です。後にしてその用途を知ることになったのです。

今の現役生は、山の歌を歌うこともなく、歌集の存在すら知らないと言うことを伺いました。ましてやテントの中で合唱などまず以ってあり得なく、多分、狂気の沙汰としか思われないのではないかと思います。私自身もたまにカラオケボックスは行くことはあれど、ワンゲル愛唱歌を歌う機会など社会人となってこの方同窓会を除けばありません。

しかし、当時はワンゲル歌を相唄うことは重要な意味合いを持っていて、

・夕食の後の一日の疲れを癒すための発散材料（これがテントの中での合唱）

・沈殿時の暇つぶし（何もやることがない、他に遊びもない、芸もないため、トランプに興じるか、唄うことしか若いエネルギーの発散方法がない）

・中には自分に歌唱力があるとの錯覚に陥って、後輩への指導と称して唄い、唄わせ自己満足に浸る（これが伝承されていくうちに、本来のメロディとかけ離れていくが、誰も正確なメロディは知らないので正調と誤解する）

・第〇〇期の歌として、宴席で披露することにより連帯感を醸成する　　などなど。

今思うに、若さというエネルギーの持って行き場の一つがワンゲル歌であり、それを媒介として仲間として連帯感を養い、強い人間関係に支えられた集団を形成していったような気がします。もちろん、苦しい思いをして山の頂上を制覇したことも、汗水足らしてやった小屋作業も、先輩、後輩を問わず強い絆を作り上げていった大きな要因ですが、ワンゲル歌もその一翼を担っていたような気がします。

現役生にとってあまりピンと来ないかもしれませんが、我々の時代はそうであったし、良き習いであったわけで、今の人たちは今の人たちで別の形で仲間同士のリレーションシップを作り上げているのでしょうし、私たちの知らないうらやましいものを持ち合わせているでしょう。時代が変われば、人間関係のあり方も変わって当然です。

前置きが長くなりすみません。当時、よく唄ったワンゲル歌を２、３紹介します。

★「懐かしのメロディ　その１」
“穂高よ、さらば”

ワンゲル歌は、基本的に単調でスローテンポ、叙情的なものが多い。従って、余程の音痴でなければ誰でも唄えるし、誰が唄ってもそれなりに聞かせる歌になる。この歌もその一つ。何故、この歌を最初にあげたかというと私の十八番だったから。これを持ち歌として後輩への歌の指南を行なったのである。歌の上手い先輩に恵まれた後輩は幸せだ？？。

１年の合宿は北アルプス、双六から西鎌尾根に上がった時に、ガスが一瞬引いたそのとき青空の中、目前に現れた厳しい岩肌のこの山を見たとき、本当に来て良かったとその時だけは思った。今でも鮮明に記憶に残っている。

その合宿で教えてもらった歌がこれ。

♪♪穂高よ、さらーば。また来る日まで・・♪

この時代はフォークの全盛期、かぐや姫の「神田川」があった。

★「懐かしのメロディ　その２」
“白山の尾根”？（題名が正しいか判らない）

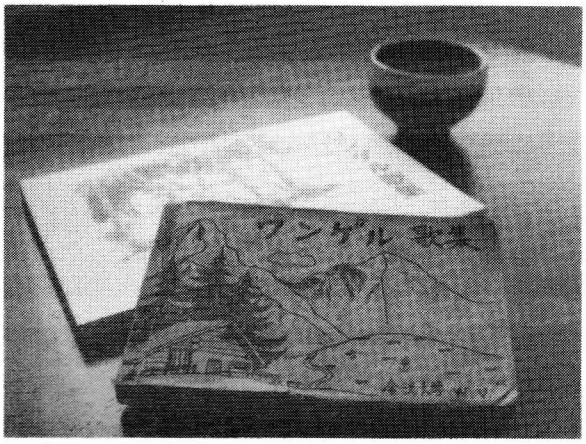
これは、まわし歌。♪♪はくさーんの尾根のー、ふーーもーと（麓）の、牛首のなーがーれ（流れ）、いーわな（岩魚）が捕れるゥ・・・♪。２題目が「白山」が「穂高」、「牛首」が「梓」、「岩魚」が「やまめ」。３題目が「ヒマラヤ」、「ガンジス」、「鯨」。まわし歌だから、次々と歌い手が変わる。４題目からは、ローカルになる。「高三郎」、「倉谷」、「おろろ」。

ここからは、更にローカルになって、「堂川山」、「堂尻川」、「大西（その時の歌い手）」。はっきり言って誰も知らない。自分が生まれた田舎を歌にしただけ。延々と続くので、そのうち皆、飽きが来て唄わせてもらえない人も出てくる。なんと時間にゆとりがあったかがわかると思う。これを書いてる本人も暇な人間と自身思ってきた。

因みに、このときの対抗馬は天地真理。♪♪あなたを見たの、テニスコート。ランラン♪沈殿のときは、明るい歌がいい。

★「懐かしのメロディ　その３」
“？？？”（題名を忘れた）

♪♪せんぱーい、リーダーは雲の上。憎ーい先輩に騙さーれてェー、入ったところがワンゲルよォーー。♪。恨み節。重い荷物、食器洗い、テントの設営、撤収は合宿とはいえ、一年生の仕事。何がトレーニングだ、封建制度が今も続いているのかと憤った。学年が上になると、やはりこれが正しい、上になれば責任が伴うものだと勝手に納得。



今でも唄えと言われれば、歌詞はおぼろげながらもメロディは覚えているので仲間がいれば唄えるかなと。しかし、山小屋やテントで歌ってたら貧粛を買うでしょうね。たまに、風呂場で鼻歌に出てくるとワンゲルの生き残りであることを感じます。

あー、いけねえ、OB会費払ってねェ。栂さん、原稿料要らんから許せ。

長々と稚拙な文章を書いてしまいましたが、ワンゲルの歌ってそんな感じです。

大野さん、とりあえずこれで我慢して。

バッチリですよ！大西先輩。トトロ会長は読みながら５、６回笑い、O事務局員は、読了後、パソコンの画面に向かって拍手を送ったくらいですもん。それにしても、自分の声に酔うように目をつぶりながら歌ったという大西先輩の唄姿、見たかったなぁ…（事務局）

ユーミンが好きだった

21期　大野直子

テントの奥と入口では、昔から、居心地も、蒸し暑さや寒さも、緊張感も、天と地ほども違っていた。奥側とはもちろん、リーダーや上級生が陣取る場所。入口側とは、テントのファスナー付近で、１年生たちがヒシと食当に励む場所である。入口から奥を見ると、リーダーたちは雲上の人々のようにも見えたものだ。

もっともこんな状況が成立するのは、だいだい色の重たい木綿製のテントだけ。今はあんなテント、山の遺産なんだろうな。きっとお椀型とかのエスパースで合宿もこなすんだろうな。

まぁそんな、テントが、家族の入る、ちゃんとした家みたいな形をしていた時代のお話。

私が１年生の時。 犀奥は大笠山での春山合宿でのことだ。２つ玉低気圧がやって来た。テントは吹っ飛ばされるは、けが人は出るはで、一歩間違えば全パーティ遭難、「ＫＵＷＶの行動に疑問？！」みたいなタイトルが北國新聞の一面に踊ってしまいそうな山行だった。

数パーティ編成だったが、私がいたパーティのテントは幸い、吹き飛んだり裂けたりという災難からは免れた。でも、テントの中は水浸し。寒さと恐怖でかなり切羽詰まった状態だった。多分、雲上の人々は、内心真っ青になりながら、如何にしたら全員無事に下山できるかを必死に考え、ひそひそ話をしていたのに違いない。

私には、そんな状況下での、歌にまつわるささやかな思い出がある。

奥側の緊張感とは反して、意外に１年生側は楽観的で明るかった。こそこそポップス談義なんかをやらかしていたくらいなんだから。

ちょうどあの頃は、井上陽水の『氷の世界』やユーミンのファーストアルバムが驚異的に売れた年だった。それまでの泥臭いフォーク全盛時代に、軟弱派ポップス系の、つまりニューミュージックなるものが台頭しはじめていたのだ。

１年生の男子のひとりが言った。

「ユーミンの詞って、軽々しくて嫌いや」

「えっ？　なんで？」と、私。

「だって、『ソーダ水の中を貨物船が通る』なんて、ぜったいありえんやろ」

「そんなことないよ！　きっと海が見下ろせる高台の喫茶店やから、ソーダ水のコップのこっち側から見たら、ソーダ水の中を貨物船がゆっくり横切って行くように見えたんやよ！」

私はちょっとムキになって身振り手振りで説明したんだと思う。すると、その男子はじめ１年生のみんなが「そっか、なるほど」と、妙に納得してくれたのだ。１年生は朝一番にシュラフから飛び出してブスに圧をかけて…と、ある種、戦友だ。その戦友たちが素直にうなずいてくれたことが、私にはなんとなく嬉しかった。

ただそれだけの話。

だけど、この小さなことを思い出すたび、テントの奥と入口の温度差みたいなものや、あの頃の純真さが思われて、胸がふつふつ泡立つ。

山の歌も四高寮歌もフォークも大好きだった。でも、ユーミンのキレイキレイし過ぎているけど、彼女がちゃんと見ている夢みたいな世界に魅かれた。「夜明けの雨はミルク色～♪」と彼女が歌えば、キスリングを担ぎながら見た４時出発の早朝の霧雨が、本当にミルク色に見えたのだから、困った。若かったなぁ。

こんなオバサンになった今も、夢見る夢子さんからはまだ卒業できないでいるけど…。

ワンゲルの歌も、中島みゆきも、拓郎も、赤い鳥も、ハイファイセットも、イルカも、よく歌ったな、あの頃。

唄ったこと

22期　森　恵利子

久しぶりにワンゲル歌集を開いてみた。遠景に山があってその手前に杉木立があって山小屋がある。一本の道に花が一輪。右下にN.T.とたちの期にとっては歌集と言えばこれだった。小さなイニシャルの入ったB7版の物。私山行の度、忘れずザックに入っていた。

カラオケのなかった頃だったから、一人で人前で唄うなんて経験はなかった。夕食後のひとときの中のほのぐらいテントの中だけ、山の中のほのぐらいテントの中だからこそできたのかもしれない。順々に、そのいい人そのの人の声に浸る時間が流れていく。渋キ声、ふんわりした声、透き通った声、ハスたくさんの歌、人に出会った。村中さんの歌声は今でも忘れられない。

みんなで唄う歌も好きだった。山道を歩きながら・・・、下山路の林道を歩きながら「山のっ子」を何人もで唄った記憶がある。体はぐったり疲れながらも、弾む心での林道下りのテンポにぴったりだった。楽しかった。

飲み会では肩を組んで唄った。照れながらも心地よかった。「ライダース　インザ　スカイ」私たちの期はよくこれを唄ったように思う。切ない歌詞なんだけど、好きだった。酔いながらも唄える歌だった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

卒業してからの山行は、小屋泊まりが多くなってしまった。歌集は本棚にしまわれた。あの歌は「ワンゲルの歌」だったんだと、今さらながら思う。

またまた再会の時に唄いましょう。

金沢大学ワンダーフォーゲル部の歌　募集！

私たちは、テントの中や新入生歓迎コンパ、追い出しコンパなど、さまざまな場面で「山の歌」を唄ってきました。OB諸氏の中には、青春の思い出と切っても切り離せない歌も少なくないのではないでしょうか？

しかし、私たちの部には独自の歌がありません。すでに千名に近いOB・現役部員がいる中で、歌のひとつくらいできるのではないかという、はなはだ独善的かつ楽観的な思いつきではありましたが、私たちがOB会役員に就任した45周年の総会で、08年の創部50周年を記念して、金大ワンゲルの歌を制作してはどうかと提案しました。

マニフェストの実行というわけではありませんが、OB会の事業の一つとして、私たちの歌ができたらいいなと思い、このたびOB会員及び現役生の皆様方から「歌」を募集することにしました。皆様方の積極的な応募を役員一同、心からお待ちいたしております。

募集要項

1. 募集する歌の種別は、「部歌」または「OB会愛唱歌」とします。応募に当たっては、次のいずれかを明記してください。　＜部歌＞　＜OB会愛唱歌＞　＜どちらでもいい＞
2. 募集の対象は、「歌詞」、「曲」または「作詞・作曲」のいずれかとします。
3. 歌詞の形式は自由です。ただし、原則として最大4題目までとします。
4. 曲の形式は自由です。提出は五線譜でお願いします。
5. 応募の締め切りは、2006年6月末日とします。
6. 選定の手順
   選定委員会（現役員とOB・現役生のうち希望する者及び役員会が依頼した者）を設置し、選定させて頂きます。選定委員を希望される方は、2006年6月末日までにお知らせ下さい。
7. 摘要

＊選定委員会で、または作者に依頼・相談して、補作・修正・編曲をさせて頂くことがあります。
＊著作権は、原則として、金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会に属することになります。
＊応募状況、その他の理由により、制作できない場合があることをご了承ください。

【参考：制作のスケジュール案】

06年　6月：「歌」及び選定委員の募集締め切り
　　7月：第1回選定委員会＜募集状況及び今後のスケジュールの確認＞
　　12月：第2回選定委員会＜応募作品の『やまざと』・HP への掲載、意見照会＞
07年　7月：第3回選定委員会＜候補の絞り込み・選定、意見の反映、補作などの検討＞
　　12月：第4回選定委員会＜候補作の『やまざと』・HP への提示、意見照会＞
08年　7月：第5回選定委員会＜意見の反映、補作・編曲、決定、譜面作成・録音？＞
　　X 月：50周年記念総会にて発表・制定